



ちょっと素敵な話

No.18

忘れられないクッキーの味

私には「この仕事をしてきた中で、感動した出来事はありますか？」と質問されて、すぐに思い出すことがあります。

利用者さんがお持ちの力にびっくりさせられた、八年ほど前のある出来事です。

その日はクッキー作業の日でしたが、注文も入っておらず、利用者さんも落ち着いておられたので、前から試してみたかった“利用者さんだけで作っていただく”ということを実践してみることになりました。

きつと途中で、職員も一緒に作るようになるだろうとは思いつつも、「みなさんだけでクッキーを作ってほしい。」とお伝えしました。職員はオーブンの陰や部屋の隅に体を隠し、利用者さんに危険がないよう、見守るようにしました。

利用者さんは私たちの予想に反し、自分たちでエプロンを着用し、使用する道具などの用意をして、作業を始められました。

天板にクッキングシートを敷いて、生地をのせて、フォークで伸ばす。

オーブンのスイッチを入れて、オーブンに天板を入れる。

焼きあがったらうちわで冷まして、クッキーをはかつて、袋に入れる…。

オーブンの時だけは近くに付いたり、多少手伝ったりもしましたが、それ以外はすべて自分たちで協力して、声をかけあって、クッキーを作り上げられたのです。

利用者さんが、自分たちでクッキーを作っている姿を見ている時もそうでしたが、できあがった製品を見た時、自然と涙が溢れそうになりました。

「○○さん、くをしてください。」

「○○さん、こっちですよ。」

「こうやって伸ばしてくださいね。」

と、毎日同じことを繰り返すような日々だったのですが、その中で利用者さんは、しっかりとすべきことを学ばれ、できることを増やしておられました。

あの頃は、個別支援計画が具体的に作成されておらず、利用者さんの成長を感じる機会が今のようによくはありませんでした。利用者さんの変化をきちんと把握できていなかったことで、より感動を覚えたのかもしれない。

この出来事から

「私たちは、利用者さんのできることやできないことを、

きちんと確認して知る必要があること、

私たちの仕事は、利用者さんが難しい所をサポートさせていただくこと」という自分の仕事のあり方を、あらためて感じることができました。

あのときのクッキーの味は、今でも私の大切な思い出です。

